

モデレーター 川中 豪 氏(地域研究センター主任研究員)  
パネリスト 重富 真一 氏(地域研究センター東南アジア1研究グループ長)  
武内 進一 氏(JICA研究所上席研究員)  
丸川 知雄 氏(東京大学社会科学研究所教授)

### [ 研究の対象について ]

(川中) 途上国研究というのは、やはり誰もやっていないところに踏み込むところが多いので、失敗は多分たくさんあるのではないかなと思うんですが、みなさんはどうでしょう。面白いと思っても実はそんなに面白くなかったとか、調査してみたら結局大したものが出てこなかったとか、うまくいかなかった事例がもしあれば、ちょっとお聞かせいただけますでしょうか。

(丸川) 自分では、大体7割ぐらいは失敗という感じがしています。特に中国は年々変わっていく国ですから、私の研究歴、約20年の中で前半の10年でやったことはもうどう考えても時代遅れなのです。以前は、国有企業などを対象としていましたけれども、結局なかなか面白く事態が展開してくれませんでした。

最近もいろいろな産業のことを見ていますが、例えば洋食器、ナイフとかフォーク。日本では燕という所が有名ですが、中国にも洋食器産地というのがあって、そこをかなり一生懸命調査しました。ただ、なかなかこれはものになり難いという感じがしています。なぜ面白くなっていかないのかと考えてみますと、やはり研究対象自体にイノベティブな展開というのがなく、何となく衰退してしまっていくようなものというものには、なかなか自分としても関心が長続きしないように思います。

それと、今回、お話をするにあたって、実は、中国を発展途上国というくくりに入れるのは適切ではないかもしれないという気を徐々に持ち始めています。経済規模で言えば日本とほぼ同規模になったわけだし、いろいろな分野で中国はフロンティアに出てきています。例えば今一番私が関心を持っているのは低炭素関連の産業で、これは太陽電池とか電気自動車などの産業です。それはもう日本の産業とまさにシンクロをしているのです。そういう意味で、やはり基本的には未来志向の分野を選んでいけば面白くなるのではないかなと思っています。

(川中) 武内さんは、紛争についていくつも本や論文を出していますが、何か他の研究トピックで、やってみようと思っていたことがうまくいかない、あるいは紛争の研究の中でどうしてもここはブレイクスルーが出ない、そういう経験はあるのでしょうか。

(武内) よくそんなふうに感じます。アフリカに行って、これはすごい眺めだと思って写真を撮るのですが、うちに帰って写真を見るとつまらなく見える。こんなはずではなかったのと思うことがあります。何かそれによく似た感覚を、自分で論文を書くときも感じます。書いてみて、こんなことしか言えないのかと。やはり、自分が見ていることのごく一部しか論文には書けないと思います。論文を書くときには証拠をきっちり詰

めなければならないので、すごく限定されたことしか言えないのですね。そうすると、これは仕方がないのですが、伝えたいことや驚いたことの本当に一部しか伝えられていないという気になります。失敗とって良いのか分かりませんが、インプットに比べて、アウトプットとしてカバーできる範囲というのはとても限られていることにフラストレーションを感じています。自分の能力がないことも大きな要因ですが、そういう感覚は常にあります。

(川中) 重富さんの先ほどのプレゼンテーションでのお話ですと、コミュニティにストレートに入って行って、非常に面白いものにぼんとぶつかったという感じだったと思うのですが、想定していたほどではなかったとか、あるいは、他のトピックでもいいですが、うまくいかないということはあるのでしょうか。

(重富) うまくいかなかったことは忘れることにしているので、そちらの方が多いでしょうが、意外と覚えていないものです。実は、コミュニティに入っていったと言いましたが、ちょっとこれは正確ではないですね。私が海外派遣でタイに行ったときに持っていたテーマは、タイの農業の市場と組織でした。だから、「農産物流通をやります」と言って行ったんです。なぜ農産物流通をやる人間が村に住んでいるのだということになるのですが、ここはアジ研の懐の広いところで、許してくれる。僕も何でそこにいかといたら、農業のことをやるのに農村を知らないとどうしようもないだろう、無駄になってもいいから1年間ぐらい住むぞ、という感じで行っているわけです。それでも、2年間滞在したうちの1年は農産物流通についてのデータをいっぱい集めました。日本に帰ってきて農村のコミュニティ研究の方が面白くなってしまって、農産物流通のデータはそのまま積んでほったらかしにしています。これに関しては、10年間ぐらい成果なしです。でも、よくできたもので、10年ぐらいたったところに、「重富さん、タイの農業流通についてちょっと原稿を書いてくれ」というお誘いがあって、それこそ10年間たなざらして段ボールに詰めていたやつを全部引っ張り出して、一つ論文が書けてしまったりするのです。

研究トピックが面白くなるかどうかというのは、当たるも八卦当たらぬも八卦みたいなところがありますが、当初うまくいなくても、それが無駄となるというのではなくて、しばらく置いておくと、このように構成し直せばいいのだというのが見つかったりして、意外と使えたりするものです。私の場合は今のところ駄目なやつはいっぱいありますが、置いておいて死ぬまでには何とかしてやろうという感じでやっています。

(川中) パネリストの3人はいずれも特定の地域とか、国に非常に関心を持って研究されていると思います。しかし、例えばタイで主に調査してきた重富さんはフィリピンの例を議論しています。他の国とか、他の地域を射程に入れて、横並びの比較のなかで特定のトピックをとらえてみようという方向に行くことはあるのでしょうか。あるいは、そうではなくて、特定の地域とか、特定の国に非常に固有な問題を象徴するトピックを取り上げているので、必ずしも他の国に行くわけではないのでしょうか。国とか地域と

という問題とトピックとの関係について、パネリストの皆さんはどう考えているのかをお聞きしたいと思います。

今日の報告の中で特に地域研究を強調されたのは武内さんだったと思いますので、まず、武内さんの方からお考えをお伺いしたいと思います。

**(武内)** 自分の経験から、一国研究には、いろいろな限界があると思っています。私は、コンゴ共和国とかガボンで調査していたわけですが、ガボン一国研究といってもなかなか難しいといいますが、テーマが限定されてしまうのです。他の国との比較は、私の場合、常に前提になっていると言っていると思います。

事実、私はコンゴで内戦を経験したのだけれども、その後、本格的な研究対象としたのはルワンダです。その最大の理由は、コンゴの政治状況が悪化して調査に入れなくなってしまったからです。アフリカでは往々にしてそういうことがあり、長期間、継続的に、特定のテーマを深めることが現実問題として難しい場合があります。加えて、英語やフランス語を公用語にする国がたくさんある反面、一つの国の中に数多くの「部族語」があるなど、一国を単位とする研究手法が言語面で優位性を持ちません。また、アフリカは国の和が多く、アジ研でも複数国を担当しなければならないので、自然と幾つかの国を比較しながらアフリカ全体の理解を深めるという姿勢が身に着いたのかも知れません。最近では紛争という問題を切り口にして、例えばボスニアやアフガニスタンなどを対象として、共通点や違いを考えています。ただ、自分なりにしっかり勉強したコンゴ共和国やルワンダは、他の国を比較する際の参照枠になっていて、自分にとっての「本籍」のようなものだと思っています。

**(川中)** 重富さんは、わりと意識的に複数の国の比較ということを主張されていますが、どうでしょうか。

**(重富)** 別に最初から比較しようと思ったわけではありませんが、私が最初に比較したのは、多分、日本とタイです。

タイというのは、やはり言語が非常に特殊なので、あれと格闘するだけでもかなり大変なのです。しかも、タイ語での文献が大量にある国ですので、話し言葉だけでできていれば済むという世界でもありません。ですから、それなりに時間がかかるのです。一通りというか、一応タイの農村社会について研究が終わったときに、やはり自分がどういう方向に行くのかを考えました。そういうときに共同研究会などで他の国の話を聞いたり、あるいはフィリピンやインドネシアに行く機会があったりして、タイを初めて相対化して見るようになりました。正直言うと、今日話したようなお話も、そうやって相対化してみたら、自分がやっていたのはこういうことなのだとわかったところがあります。そうした機会があったから、タイよりも他の国に行きたくなりまして、中国の農村、インドの農村やミャンマーの農村にも行きました。

私は先ほどの報告で三つの輪を書きましたが、あの輪を頭の中に入れて、どこの農村にいても、通訳を通してその三つがどうなっているかを聞くのです。聞くと大体そのことがわかるようになります。三つの輪がどうやって重なっているかを聞いてくると、

何となく、ここでプロジェクトをもしやるのだったらこの単位に金を落としたりいいのではないか、というようなアイデアが出てくることに気が付いたのです。やってみると失敗するかもしれないのですが、少なくとも入り口としてはそういう発想ができると思っています。

(川中) 中国は非常に大きいので、中国だけでも研究が大変だということもあるかと思いますが、しかし、丸川さんはベトナムに行くなど、他の国も研究されています。産業研究という点から中国を取り上げることの意味と、あと、もう一つ比較というところと、こういった形でご自身の研究の中では位置付けられているのでしょうか。

(丸川) 私が中国以外で多分一番調査したのはベトナムで、これは JICA のプロジェクトです。中国での私の最初の大きなテーマは、国有企業のグループ化でしたが、ベトナムが全く同じことをやっていたので、それを調べに行きました。しかし、やはりものすごく限界を感じました。現地語ができないということが大きな障害になりました。もちろん優秀な通訳を通じて私も聞いたことはすべて書き取るのですが、いかんともいえない隔靴搔痒の感があります。中国語だったら、言葉の中身だけではなくて、相手の表情を見て、話者が実は「いや、これは建前なのだよ」と伝えようとしている、というようなニュアンスは通じるのですが、ベトナムだと全くそういうニュアンスが分からないのです。結局、通訳のフィルターを通ることで、通訳の理解に私の理解が限定されてしまいます。そういう意味で、逆に地域研究者の強みというのはそういうところにあるのかなと思っています。

一方、自動車産業で、ブラジル、インド、中国、日本各地といろいろ調査したのですが、こういうものであれば、もの自体を眺めることで、あるいは工場をみることでかなりのことが分かりますから、これは比較しやすいですね。逆に言えば、自動車産業というのは非常にグローバルイズされた産業で、世界中で例えばトヨタ生産方式(TPS)と云っていますから、そういう意味では比較しやすい分野です。しかし、とても地域研究者以外が入っていけない分野もまた逆にあるということをベトナムで痛感しています。

### **[ 研究の方法について ]**

(川中) 基本的に今日の3人の話の流れというのは、対象地域なり、国なり、領域における現実の動きがあって、その上に研究を始めていって、問題を見つけていくということになると思うのですが、では、問題を見つけた後、あるいは面白いと思ったトピックを見つけた後、どうやってその後その研究を組み立てていくのでしょうか。

アジ研では、伝統的に、取りあえず情報を片っ端から集め、できるだけ集めた中から一般的な法則であるとか特徴を抽出して提示をしていくという、帰納法的なやり方が多いかと思います。一方で、社会科学、特に経済学なんかでは、まず理論があって、その理論から恐らくこうなるであろうという予測を導き出して、その予測が当たっているかどうかを実際のデータで検証してみるという、演繹的なやり方もあるかと思うのです。

皆さんは意識しているかどうかは別として、帰納的な事実を積み上げていくやり方と、

演繹的なやり方をどのように考えていらっしゃるのかをお話いただけますでしょうか。それぞれの利点とか、デメリットとか、あるいはご自身の研究の中でそれを使い分けているのか、あるいはどちらか一方に依存しているのか、そうしたことについて伺いしたいと思います。

(重富) そのように二つに分けられたら、明らかに私の考え方は帰納的です。その村に行って、何かに出会って、これは一体何なのだろうともやもやと考えて、そこからこれはこういうことなのではないかと解釈を作っていくやり方をしています。ただ、演繹的な思考をしていないかという、そうでもありません。村で出会ったものから考えて出てくる、あるいは本を読んで勉強したコンセプトをもとに、頭の中でそれこそコンセプトのお遊びみたいなことをして、これだったらこうなるはずだということはやはりやっています。結局は両方の組み合わせなのではないかと思っています。

宮本常一という、もう亡くなりましたが、日本の民俗学者の方の『忘れられた日本人』というのが岩波文庫にあり、最近、これを読みました。これが農村調査としてはもうすごい。戦前から歩いていますから、とにかく脚半で歩いて、農村に行って年寄りなんかの話を聞くわけです。書いているのを見ると、お年寄りの方がしゃべったことを全部書いているような文章なので、小説みたいな感じになっています。その後書きに宮本常一が、実は私はこういう問題関心で聞いていましたという、彼なりのすごくシャープな仮説というか、こうなるはずなのではないかというものがあるのです。だから、結局はそのところがないときちんとした作品にはならないから、頭の中ではやっているのではないかと思っています。

(川中) このパネルを組むにあたって、パネリスト3人の著作をあらためて読んでみたのですが、丸川さんの『労働市場の地殻変動』では、数理モデルを使って、回帰分析もやっていて、そういう意味では演繹的な方法と検証という、経済学のオーソドックスなやり方もやっているかと思うのですが、ご自身の研究の中では、それはどういう位置付けになるのでしょうか。

(丸川) 私はこう思うのですが、似たような同質的なものが、人でもいいのですが、企業でもいいのですが、3けたあったら回帰分析か何か、統計的な分析はやってみるべきだろうと。先ほどの武内さんのお話では、経済学が入ってきたというお話だったのですが、アフリカは四十数カ国ありますよね。四十数カ国で3年のパネルデータを取れば140ぐらいのサンプルが得られます。そうすると、統計分析をやると大体何かが有意になるのです。だから、もしアフリカに3カ国しかなかったら、多分彼らはこの分野に参入しなかったのではないかと思っています。そういう意味で、私は統計的な分析というのは、もちろん使えるのだったら使えた方がいいし、その道具立ては多数持ち合わせた方がいいと思います。しかし、やはり使い道をしっかりよく考える必要があるとも思います。決して適切でないところへ持ち出してくるべきではない。こうしたものは人間が社会を把握する一つの手段であって、それが言葉の論理的な展開で把握できるのだったらそれはそ

れでいいし、例えばルワンダのジェノサイドみたいな、それこそワン・アンド・オンリーの事態を説明するのに、統計分析というのはおよそ利用価値がないだろうと考えております。

先ほどの問題提起について言えば、やはり何の仮説もなしに現地に乗り込んでうんぬんというのは、それはあり得ないだろうと。そもそもそれだったら誰に何を質問するかということからつまずくはずです。一方、仮説というのはやはり捨てるためにあるのであって、だから、最終的に論文にする段階では、当初の仮説ではなくて、むしろ中身ができてから最後に仮説を書くぐらいの感じでもいいのではないのかと思います。一応論文の格好にするために、仮説に意固地にこだわると、こっけいなことが起きます。昔テレビで見たコトで、邪馬台国トルコ起源説というのがありました。「私はこれを証明しにトルコの地にやってきた」と言って発掘するのですが、そうするとピラミッドとか、いろいろなものを発掘してしまって、それで「埋めておこう」となってしまった(笑)。ひょっとするとそういうことが社会科学でも多く行われているのではないかと思います。大事なことが実は見えているのに不適切だから無視してしまおうという態度は、ばかばかしいと思います。

(川中) 先ほど報告の中で、武内さんは経済学が紛争研究に関わってきているとお話されました。どちらの手法が上ということではないのだけれども、すごく刺激を受けるという話がありました。それと関連して演繹的な方法で理論を考えることと、事実を積み上げていくことは、武内さんの中ではどう考えていらっしゃるのでしょうか。

(武内) 研究をやるときに、私は二つの力が必要だと思っています。一つは、問題を説明する力です。私は、地域研究の強みは、問題を発見する力にあると思っています。こんなことが起きているのだと驚くためには、現地に行って驚くことが一番早いのです。一方で、これは丸川さんや重富さんが言っていることと基本的に同じですが、驚くためには理論が必要です。理論からずれているから驚くのです。これまで考えてきたことと違うところに驚いているわけですから、こうなるはずだという、説明の仕方、言い換えれば理論があって初めて驚けるのだと思うのです。そういう意味で帰納と演繹というのは、セットだと思います。

その上で、いろいろな高さから対象を見ることが重要だと思っています。ルワンダのジェノサイドの場合でも、村の中の間人間関係がもとで殺人が起こるとか、ローカルのエリートの扇動によって虐殺が始まるとか、ナショナルなレベルの政治家の指示である地域の軍隊が活発に動くとか、あるいは、アメリカの政策によって国連平和維持部隊が撤退し、虐殺が放置されるとか、さまざまなレベルでの要因が影響していました。つまり、国際社会のレベル、ナショナルなレベルとか、ローカルなレベル、村レベルといったように、それぞれ違う力学が働いていて、それらの総合としてジェノサイドという現象が起きているのです。私はそれをトータルに捉える必要があると思うのです。そういう意味でいろいろな高さから物事を見ることは必要であって、それには帰納的な方法も演繹的な方法も両方有効だと考えています。

## **[ 研究成果の受け取り手について ]**

(川中) 最後にオーディエンスの問題です。研究者としては当然研究者仲間からの評価が気になると思いますが、皆さんは、どういった研究者に評価されることを意識されているのでしょうか。

もう一つは、社会科学の研究者としては、当然社会からのいろいろな期待というものあって、例えば政府の政策担当者だとか、企業関係者、NGOなどの民間の方々、学生、あるいはメディアを通じて特定されない多くの受け手の方々に対する対応を求められることになるかと思います。そういった研究者ではないの方々に対する自分たちの研究のアピールというか、成果の公表というものをそれぞれの研究の中でどう位置付けられているのでしょうか。

(武内) 研究者としてのオーディエンスという意味では、面白い研究をしているなと私が思う方に、私のやっていることを面白いと思われたい。同じ地域だとか、同じディシプリンということはあまり考えません。私が、この人のやっていることは面白いなあと思う人は周りにもいるわけですが、望む樂は自分の研究をそういう人たちにも面白いと思ってもらいたい。そう考えています。

それから、研究者以外のオーディエンスをどう考えるかですが、もちろんアジ研の人間として、社会的な要請に応える使命があるので、当然対応するわけですが、そういう義務感だけではなくて、むしろ私は非常にそういう研究者以外の方との接触から、いろいろな驚きを教えられたり、目の付け方や、問題関心の持ち方を勉強させていただいています。それは僕にとってはとても重要なことで、可能な限り対応したいといつも思っています。

(重富) 今、武内さんが言われたことと同じかもしれませんが、自分が研究をしていけば、理論的な枠組みはこんなのがあって、これは面白い枠組みだと思うことになります。そうすると、その枠組みで何か一言言いたいと思ってやるから、研究所のオーディエンスというのは、やはりその枠組みをしっかり作った人たちなのでしょうね。でも、そんな私程度ではそういう人たちにはどうせ届きませんから、もう本当に螻蛄之斧なのです。

それから、実践ということと言うと、先ほど私はアジ研に就職したのは、大学院の後、就職がなかったからと話しましたが、もう一つの理由は、日本の農業を研究していたときに、農村で農家の方と話していると、はるかに僕より生活が良くて、なぜ私がわざわざこういう人たちのために研究をしているのだらうと思ったことにあります。それであれば、やはり農業をやって貧しくて大変な方を研究するのがいいのではないかと、そういう漠然とした若き日の熱意みたいなのがあって、途上国の農業を研究しようとなったわけです。実際に農村で貧困者が多いといわれて研究に取り組んで、いまだに、そういった貧困を解決できる方策はないか、少なくとも何かできないか、というモチベーションはあるので、研究しながらも最後、こんな方法でちょっとやれませんかという、実務者の方にラブコールを出しています。でも、実際にタイ農村、例えば東北タイというタイの中で一番貧しい所に入ってみると、この人たちはおれよりも豊かだよなというのが

いっぱいあって、何か自分の最初の動機みたいなものが揺らいできたりはします。こういうところはなかなか難しいところだと思います。

(丸川) 私は特にアジ研の皆さんにはオーディエンスのことを意識してほしいと常々思っております。というのは、われわれが普通に文章を書くと、もうそれは同業者向けになってしまうのです。そうするとやはり基本的には同業者にしか伝わらない。アジ研というのは幸いにしてその同業者が百何十人もいるのです。けれど、そういう環境というのはアジ研から外へ出ると稀です。私は今、東京大学の社会科学研究所というところにいますが、むかし私の向かいの研究室にいた先生は産業組織論の専門です。私は彼に「何の産業を研究しているのですか」と言ったら、彼は何という質問をするかという顔をして、「産業組織論というのは、不完全競争の研究であって、そんな特定産業の研究ではない」と答えました。もうなかなか隣の人とも共通の言葉を見いだすのが難しいので、そういう中で自分の存在を、例えば大学の同僚にアピールしようとしたら、それは思い切りキャッチーにやるしかないのです。だから、そういうことで私は余裕があれば、なるべく面白く、できれば、うちの妻にも読んでもらえるように書いているのです。そうやると、意外にいろいろな学者の人から、学者といっても全く同業の人ではなくて、例えばロシアの研究者とかそういう人たちから「あなたの書いたものを読んだよ」という声をかけてもらえるのです。そういうところが非常にやりがいになっています。

(川中) 本日は、長い時間になりましたが、お越しのみなさまには、本講座「発展途上国研究への招待」にお付き合いいただきまして、どうもありがとうございました。(拍手)